



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北大百年の諸問題. 札幌農学校と米欧文化
Author(s)	田中, 彰
Citation	北大百年史, 通説, 487-505
Issue Date	1982-07-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/30022
Type	departmental bulletin paper
File Information	tsusetu_p487-505.pdf



北大百年の諸問題

札幌農学校と米欧文化

田 中 彰

一 一八七〇年代の米欧文化と日本

一八七〇年代、つまり札幌農学校が設立された一八七六年（明治九）当時の米欧文化がアジア（日本）のそれと対比してどのようなものであったかを全面的に論じることが容易なことではない。

したがって、ここではこのころ、米欧一二カ国を回覧した岩倉使節団の目にとらえられた米欧文化の諸特徴を、本稿で必要な限りでみていくことから始めたい。

岩倉使節団は、右大臣岩倉具視を特命全權大使とし、参議木戸孝允、大蔵卿大久保利通ら当時の明治政府の実力者が副使に名を連ね、総勢約五〇名の大使節団だった。一行は一八七一年（明治四）から七三年（明治六）にかけて一年一〇カ月の間、

米・英・仏・ベルギー・蘭・独・露・デンマーク・スウェーデン・伊・奥・スイスの一二カ国を回覧した。彼らは国書の捧呈や条約改正の予備交渉の他、米欧の近代国家のあり方やその文化をつぶさにかつ鋭く考察しているのである。その報告書『特命全權大使米欧回覧実記』（久米邦武編、全五編一〇〇巻、五冊。岩波文庫版、全五冊。ただし、以下のページ数は原本による）は、太政官記録掛刊行として一八七八年（明治一一）に出版された。札幌農学校開設の翌々年である。

その各編には各国の見聞記があるが、第五編では五巻にわたって総括がなされている。以下この「総論」部分を中心に、いくつかの特徴点を浮彫りにしてみよう。

その第一は、人種論をひとつのメルクマールにして（もとより、人種論で米欧とアジアをすべて割りきっているのではない）、東西両洋の性格と発想のちがいを指摘していることであ

る。すなわち、白人種は「情慾ノ念熾シニ、宗教ニ熱中シ、自ラ抑制スル力乏シ、略言スレハ、慾深キ人種ナリ」といい、黄色人種は、「情慾ノ念薄ク、性情ヲ矯揉スルニ強シ、略言スレハ慾少キ人種ナリ」という。ここから西洋の政治は「保護ノ政治」であり、東洋は「道徳ノ政治」になる、という（第五編一四八ページ。以下、V一四八ページと略記）。

ではなぜこのように一方には「慾深キ人種」、他方には「慾少キ人種」を生じたのか。それを風土との関わりで次のように説明する。ここに第二の特徴をみる。

つまり、ヨーロッパの土地はもとも肥沃でないから農耕のみでは生活ができず、牧畜で補ってもなお満足できない。勢い彼らは地中にまでも利を求め、あらゆる工夫や労働力によって天然の条件を克服していったが、アジア（日本）はその逆である、とする。だから、風土との関わりにおいて、ヨーロッパの勤勉に対してアジアの怠惰を指摘するとともに、特に日本の場合は模倣性を強調している。

『回覧実記』は「凡ソ天然ノ利ハ、必ス人功ヲ経テ、実益ヲ発ス、天産ニ人工ヲ加ヘテ、其形ヲ変化セルヲ工産トイフ」（V二二五ページ）という。そして、さらに、「欧洲ノ経済説」を引き、この工産の諸形態を「化形」「変形」「変位」という語で分ける（V一九〇—一九一ページ）。これらの語は、それぞ

れ農業、工業、商業に対応しているのである。

こうしたヨーロッパに対してアジアは、「嗚呼、天利ニ富ルモノハ、人力ニ惰リ、天利ニ儉ナルモノハ、人力ニ勉ム、是天ノ自然ニ平均ヲ持スル所歟」（Ⅲ二三九ページ）という。そこにはアジア（日本）への自省をこめた嘆声がある。

第三に、右のことは、人民の自主の権や財産権の主張とからむ。

ヨーロッパの国民は、みずからの「情慾」を遂げ、快美の生活をなそうとするから、勢いそこでは自主の権をとえ、自己の財産には君主といえども指一本触れさせない。ところが、アジアではそういう「利欲ノ論ハ、最モ人ノ恥ヅル所」（V一六二ページ）だとする。つまり、アジアにおける「廉恥」とヨーロッパにおけるそれとは、全く内容を異にしている、とみるのである。それが前述の東西両洋の「道徳」と「保護」の政治の相違とも連なるのである。それは同時に、ヨーロッパにおいてなぜ自由や民権の論がおこり、産業革命によって資本主義が勃興したか、ということにもなる。

そのことは、第四に、東西両洋における社会構造のちがいの認識にも連なっている。

すなわち、『回覧実記』はヨーロッパの社会の特質を「会社」的性質とみる。いうなればそれはゲゼルシャフト（利益社

会) 的な社会であり、これに対しアジアはゲマインシャフト (共同社会) 的な社会とみるのである。ここにも「慾深キ人種」と「慾少キ人種」という規定が背後にある。そして、ヨーロッパ各国における「共和」「君民同治」「専制」の政治形態の相違も、所詮はその「会社ノ結習ニ出サルハナシ」(V一六一ページ) と断言して憚らないのである。

すでにみたところから明らかなように、ヨーロッパとアジアでは「富」をめぐる全く異なる発想があった。西洋世界が「瘠悪」な風土に対し、「能講究シ、能刻苦シ、能ク協和シ、人事ヲ尽シ、天ニ勝ツノ道ヲ求」(V二四三ページ) めるとすれば、そこにはおのずから合理的、体系的な思考様式が要請される。ここに第五の特徴がある。

ヨーロッパにおいては、「理、化、重ノ三字ヲ開キ、此學術ニモトツキ、助力器械ヲ工夫シ、力ヲ省キ、力ヲ集メ、力ヲ分チ、力ヲ均クスルノ術ヲ用ヒ、其拙劣不敏ノ才智ヲ媒助シ、其利用ノ功ヲ積テ、今日ノ富強ヲ致セリ」(II二七七ページ) というのである。それは、「西洋人ノ事業ヲ起ス、其目論見ヲ立ルトキニ、甚タ周密ニ思慮ヲ尽シテ、事事詳慎ナルコト、殆ト日本人ト反対ノ性質ナリ、其考案商量ヲ積ミ、其成果アルベシトスレハ、雛形、図取ヲナス」(III二一五ページ) といい、また、「東洋人ハ実験ニ巧者ナリ、西洋人ハ術理ニ達者ナリ、東洋ノ巧ミナルハ手

術ニアリ、西洋ノ巧ミナルハ器械ニアリ」(II四三七ページ) という指摘にも通ずるだろう。その思考様式を『回覧実記』の表現を用いて対比的にいえば、「東洋人」―「プラチカル」―「無形ノ理學」に対し、「西洋人」―「タオリック」―「有形ノ理學」ということになる(V二三四ページ・I五〇ページ等)。

以上、五つの特徴を列挙したが、もとよりこれに尽きるものではない。しかし、一八七〇年代の日本側からみた東西両洋の文化の相違の認識だけは十分にうかがえる。もちろん、こうした認識は、日本人の能力の欧米に対する劣性を強調するためのものではない。むしろ『回覧実記』は随所にそれを克服しうる能力を日本がもっていることを確認しているのである。そして、そこにいわゆる「脱亜入欧」的な発想が重なっていたことも否定できないのである。⁽¹⁾

そのことは、いまはさておき、本稿の課題からいえば、この岩倉使節団がアメリカに足を印したとき、そこで強烈に印象づけられた次の二点だけはつけ加えておく必要がある。

そのひとつは、あまりにもアジア(日本)と異なった男女の風俗であった。一行が初めてサンフランシスコのホテルに入ったとき、紳士淑女はすべてカップルで肩を寄せ合い、男性があたかも女性のしもべかのごとく振舞う姿をみた。久米邦武の表現でいえば、それは「下劣な風俗」であり、「全く乾坤を反覆

した嫌天下」がそこには展開していたのである（『久米博士十九年回顧録』下巻、二五三ページ）。

これは米欧世界に当時接した日本人の共通した感想だった、といつてよい。一八八六年（明治一九）、ロンドン滞在中の矢野文雄も、その著『周遊雜記』（同年刊）の冒頭で、「西洋ノ男女風俗ノ事」を述べ、「女房ハ大將軍ニテ亭主ハ其ノ副將軍タル姿ナリ」（三二ページ）といったのである。

もうひとつは、急速なアメリカ開拓の進展を目のあたりにしての感想である。使節団はこのアメリカの開拓の中に、近代国家における人民の自主と自由の典型をみた。『回覧実記』が「天地ノ利ハ、人力ヲ加ヘテ始テ興ル、昔日ノ勞ハ今日ノ富ナリ」（一七九ページ）と述べているのは、すでに指摘したのと重なるが、そのとき「不教ノ民ハ使ヒ難ク、無能ノ民ハ用ヲナサス、不規則ノ事業ハ効ヲミス」（一四六ページ）といっていることは留意してよい。そこに使節団は教育と宗教の役割を痛感したのである。

あのアメリカの「紳士」たちが、なぜ熱心に宗教を信じ、さかんに「小学」をおこし、「高尚ノ学」をあつにして普通教育に力を入れているのか。それは「頑魯」な「流民傭奴」の「明善ノ心」を啓発するためであり、そのためには何よりも「敬神」が不可欠であり、「学知ノ益」を与えるためには、「言

語、筆算、物理」が切に必要なからなのである。そして、生活が定まるや、これに「規則」を付与し、「功程」を課し、それを「監督」し、信賞必罰、率先して生産を興さなければならぬ、とする。

かくして、「民心ミナ其方向ヲ一ニシテ、富殖ノ源ヲ培養スルニヨリ、国ノ興ル勃如ナリ」というのである（一四六ページ⁽²⁾）。さて、本稿の主題とからめていえば、さきの五つの特徴は、札幌農学校と米欧文化をめぐる遠景であり、ここに挙げた二つは、その近景といつてよい。

そのことを念頭におきつつ、一八七〇年代のこの米欧文化に対する日本の対応を次にみることにしよう。

二 開拓使の留学生派遣

明治維新後の新政府の米欧への文化的対応は、ひとつには幕末以来の留学生派遣のいっそうの推進であり、もうひとつは雇用外国人の積極的導入であった。

まずその留学生の問題からみていこう。

この各国への留学生数（表1）は、明治初年における日本の米欧各国への関心度の指標でもある。

一八六八〜七四年（明治元〜七）の人数でみると、アメリカ

表1 明治初年の留学者(延人員)

	1868—74年	1870年	1871年
カス ツス ア 国 ア ー 港 ー ダ ス	209人 168 82 60 9 7 5 4 2 2 1 1	69人 55 32 25 4 2	80人 71 34 17 4 7 2 2 1
メ ギ イ ン シ ン ス ト ギ リ ン イ			
アイ ド フ ロ 中 オ ベ 香 イ オ ス			
計	550	187	218

備考 石附実『近代日本の海外留学史』第15表(154ページ)より作成。

原表の註によると、実数 575人 から残留者、出発の年・国が不明の者は除かれ、複数の国にまたがる場合は、別々に算入してある。

が圧倒的である。これはあとでふれる開拓使からの留學生が大きく影響しているが、その留學生数のピークを示した(その後は規制によって整理される)一八七〇年(明治三)ないし七一年の数字では、アメリカとイギリスが上位を占め、次いで独・仏ということになる。これを『回覧実記』一〇〇巻の各国別巻数と対比してみると、ほぼ対応している(表2)。

表2 『米欧回覧実記』構成表

	巻 数	備 考
カス ツス ー ア ー ダ ア ス ン ク	20 20 10 9 6 5 3 3 3 3 2 1	
メ ギ イ ン シ ン ス ト ギ リ ン イ		
アイ ド フ ロ 中 オ ベ 香 イ オ ス		
ス デ		
ヨ ー ロ ッ パ 総 論 会 博 覧 展 示 の 他	5 2 1 7	(ウィーンにて開催) (実際には回覧せず) (帰路)
計	100	

さらにこれを開拓使の留學生に焦点をしぼると次のようになる。

表3によると、一八七一一七二年(明治四一五)の官費留學生、とりわけ開拓使派遣の留學生がアメリカに集中しているかは一目瞭然である。ここに第一の特徴がある。石附実著『近代日本の海外留学史』(ミネルヴァ書房、一九七二年)は、留學生がアメリカに集中している背景として、(1)幕末からの日米関係、(2)アメリカにおけるキリスト教各派の海外宣伝活動、(3)アメリカが新興国であったことを挙げているが(一五六―一五七ページ)、開拓使の場合は、右の(3)とからめて北海道とアメリカとの共通性を指摘しないわけにはいくまい。

表3 1871~72年官費留学生・開拓使留学生

派遣国別人数比較表

	英	米	仏	独	露	伊	白	奥	欧米	清	合計
官費留学生	49	55	17	16	5	1	1	1	2	8	155
開拓使留学生	0	24	3	0	6	0	0	0	0	0	33

(開拓使留学生数は官費留学生の内数)

表4 官費留学生修学学科目及び人数(1871~72)

英	海軍11、造船2、土木学1、測量3、建築1、灯台技術2、造幣5 メリヤス製造1、法律4、経済(含商法)4 英学・普通学2、学科質問・文物制度3、不明13
米	海軍2、造船1、農学13(12)、牧畜学2、工学3(1)、鉱山学7(6) メリヤス製造・染物・塗物・織物・ガラス製造各1 法律3、運上所規則2、経済2 普通学(女子教育)5(5)、学科取調1、不明4
仏	海軍・陸軍各1、造船2、鉱山3(1)、工学1(1)、農学1(1)、会計法1、法学・経済学1、哲学1、学科質問1、不明3
独	軍制1 医学1、建築土木学・舎密学・物理学・薬剤各1、法律1、政法経1、学校事務1、不明7

()内は開拓使留学生人数

備考 表3・表4は青山英幸・山田博司「札幌農学校成立の背景」
 (『北大百年史編集ニュース』第1号, 1977年6月)所収より再録。ただし、数字の一部は補正した。

さらに、それを留学生数が上位を占める米・英・仏・独別に、しかも修学学科目別の人数を示した表4によると、第二の特徴として、開拓使が農学・鉱山学・工学並びに普通学(女子教育)に重点をおいて留学生を派遣していることを指摘できる。

そこでは、法学や経済学、あるいは軍事、さらには各種の製

造技術等の修学よりも、北海道の開拓に直接必要な技術の修得がめざされているのである。「開拓使事業草創ノ際ニ当リ、農工諸術実用ノ材」(後述の引用参照)が求められているのである。

また、異色の女子留學生が派遣されているのは、前節でみた米欧の男女の風俗に対する日本の文化衝撃への対応の一形態と

もいえる。それが開拓使を通してあともふれるような形でなされているところに、第三の問題との関連がある。

では、第三の問題とは何か。

それは開拓使が北海道という風土性の上に立って発想されていることである。ここにいる風土性とは、北海道の地理的、歴史的諸条件のすべてを包みこんだ総体をさす。

開拓使の首脳は、開拓次官（のち長官）黒田清隆をはじめ主として鹿児島出身者であり、彼らはかつて幕藩体制下、琉球という植民地的存在をもつ薩摩藩で育った。私は明治政府ないし開拓使の北海道政策の基調には、この薩摩藩の琉球支配をふまえたものが、一転北海道では形を変えて表出していると思うのだが、それは端的にはこの北海道を彼らが未踏の実験場とみたことにあらわれている。だから彼らは、長い歴史的背景のある琉球に沖縄に対しては「旧慣温存」方式による収奪で臨んだが、この北海道の地においてはその風土性を強調して実験のための投資方式をとった。いち早く開拓使による一〇カ年投資計画がたてられ、それが実行に移されたことを想起してほしい。

だが、琉球に沖縄と北海道とのこの対蹠的な方向にもかかわらず、近代天皇制の形成をめざす明治藩閥政府（とりわけ薩摩）の発想の基調の共通性は看過してはならない。

かかる意味をも包みこんだ北海道の風土性の上に立っての実

験的投資の意図が、右の開拓使の留学生派遣にはこめられているのである。

そのことは開拓次官黒田清隆の、以下に引用する政府に対するさまざまな意見書の中によみとることができる。

夫レ開拓ノ要ハ、山川ノ形勢ヲ審ニシ、道路ヲ通シ、土地ノ美惡ヲ察シテ牧畜栽培ヲ盛ニシ、以テ生ヲ厚シ俗ヲ美ニスルニ在リ、然而テ之ヲ為スハ人才ヲ得ルニ因ル、人才ヲ得ルハ教育ニ在リ、今ヤ欧米諸國能ク子弟ヲ教育シ、兒子未タ襁褓ヲ免レスシテ能ク菽麥ヲ辨ス、是他ナシ、其母固ヨリ學術アリテ幼稚ノ時ヨリ能ク其ノ教育ノ道ヲ尽スニ由ナリ、然ハ則チ女孺ヲ設ケテ女學ヲ興スハ人才教育ノ根本ニシテ、一日モ忽ニス可ラサルナリ、他日果シテ此孺ヲ設ケ人才教育ノ基ヲ立ルハ、今ヨリ幼年ノ女子ヲ撰ミ、欧米ノ間ニ留學セシメ、其學資ハ當使定額中ヨリ之ヲ措辦スヘシ

（明治四年十月、句読点・傍点は引用者、以下同）

北海道ハ極北沍寒ノ地タルヲ以テ人情久住ヲ樂マズ、古ヨリ開拓ノ功竣ヘ難シト称ス、是故ニ之ヲ経営セントスルハ非常ノ舉非常ノ才ニ非レハ能ハス、客歲盛學ノ成算ヲ商議セシニ人才ノ教育農工ノ學業ヲ以テ第一ト為ス（明治五年九月）

開拓事業草創ノ際農工諸術實用ノ材ニ乏キヲ以テ諸生ノ志

表 5 開拓使派遣留学生一覧

学資 支給	留学 国名	学 科	発 遣	帰 朝	族 籍	人 名	発遣 年齢
開 拓 使	米 国	工 学	明治 4年1月4日	8年5月	青森県士族	山川健次郎	19
		鉱 山	4年1月4日	7年3月 ^㉔	酒田県士族	服部敬次郎	16
			5年2月18日	7年2月6日	鹿児島県士族	大山 助 市	15
				同	同	村 田 十 蔵	15
				同年3月4日	山口県士族	大和七之允	17
					鹿児島県士族	鮫島武之助	22
				7年2月6日	山口県士族	志道新之允	18
		農	在米中、5年1 月、開拓使管轄		同	中島政之允	
			5年2月18日	7年2月6日	鹿児島県士族	税 所 長 八	17
						市 来 宗 介	24
						西 郷 菊 次 郎	13
						柴 山 彌 八	22
						得能新二郎	13
				12年3月	東京府士族	工 藤 精 一 郎	17
			在米中、5年1 月、開拓使管轄	7年11月	群馬県士族	新島七五三太	32
	普 通	4年11月12日		5年10月27日	東京府士族 吉益正雄女	吉 益 亮	17
				15年11月	同津田仙彌女	津 田 梅	10
				5年10月27日	同上 田 峻 女	上 田 悌	17
				14年10月29日	静岡県士族 永井久太郎女	永 井 繁	12
				15年11月	青森県士族 山川與七郎女	山 川 捨 松	13
	露 国	鉱 山	4年1月4日		鹿児島県士族	二 木 彦 七	16
		農	5年2月18日		高知県士族	宮地堅一郎	23
				7年3月7日	山口県士族	江 村 次 郎	22
				5年8月	同	桐 原 仁 平	22

開拓使	仏国	鉦山	5年2月18日	7年2月24日	静岡県士族	榎本彦太郎	20
		農	同	同	鹿児島県士族	山口彦次郎	17
		工	5年2月	同年3月7日	足羽県士族	長谷部仲彦	23
大蔵省	米国	農	4年1月4日	6年10月	鹿児島県士族	種子田清一	23
				7年2月6日	同	最上五郎	26
				7年2月	山口県士族	山尾常次郎	23
		鉦山	同		同	来原彦太郎	16
	露国		4年11月12日	7年3月5日	東京府士族	土肥百之	17
				7年3月7日	同	来見甲蔵	18

備考 大蔵省編『開拓使事業報告』第4編669～670ページを基にし、他の史料により補正。

大蔵省学資支給の6名も開拓使の派遣である。

表6 開拓使留学生出身府県

出身府県	留学生数
鹿児島	12
山口	7
京岡	6
森岡	2
知田	2
羽馬	1
馬	1
計	33

若干の指摘をしておこう。
表5からその出身府県別に分けてみると、表6のようになる。
この表の特徴は、第一に鹿児島県出身者が三分の一以上を占め、山口県がこれに次いでいることである。そこには薩長とりわけ薩摩の比重が重いこと

が指摘できる。

第二は、東京府・静岡県それに青森県というように、旧幕臣または維新の敗者に近い立場にあった藩の出身者が多いことである。それを最もきわだたせているのが女子留学生に他ならない。

る。
これまで述べてきたことをもう少し具体的に説明する意味で、この表から
「開拓使事業報告」第四編所収）
と、その開拓使派遣の留学生の一覧表を掲げると表5のごとくである。
本使差遣留学生徒ハ、昨秋以来数回稟議ノ如ク、農工鉦学ノ現術技業ヲ專習セシメ、固ヨリ学科ノ正則ヲ踐ミ全材ヲ成達セシムル者ニ非ス、其実農夫工人同一ニシテ其技術卒業ノ遅速ハ拓土開物ノ成否ニ關係シ、尋常普通ノ規則ヲ以テ拘束スヘカラス、（明治六年十二月）（以上、いずれも「開拓使事業報告」第四編所収）
収ルハ意ナリ、（明治六年四月）
ヲ奮ヒ、身ヲ北海道ニ委セント欲ル者ヲ選ビ、其才質ヲ検シ、之ヲ海外諸国ニ遣リ、各其所長ニ就キ、専ラ其技ヲ習ハシム、固ヨリ速ニ其益ヲ

かつて渡辺修二郎氏は、「こゝに注目すべきは孰れも当時の政争に於て敗者となつた東北地方又は東京の士族の少女で大抵外務省又は開拓使の下級吏員の娘から採つたことが窺はれます」といい、私も「彼女たちは未知の世界への実験台に立つために選ばれた人身御供だつた」と述べたことがあるが、この第二の特徴は、実は第一のそれとあらはらの関係にある。権力を握る側からいへば、一方では藩閥の結合（もとよりそれは官僚機構の形成・整備とともにそれとからみつき、流動化する）でみずからの体制を固め、他方においては、維新の敗者またはそれに近い立場の者を北海道に開拓使を通してフルに活用しようとする意図がある。と同時に、それは、敗者の側からいへば、権力とその意図を逆用して、新たな世界へみずからを飛翔させようというしたたかな意志を秘めていたとみてよい。

この第一と第二の要素のかみ合ったところに開拓使はあった。いや、それはたんに開拓使にとどまらず、岩倉使節団や開拓使の背後にあった大久保政権の構成の中にもそれを見ることができ（る）。維新の変革それ自体が、そうした要素の統一の上に展開していた、といえるのである。

札幌農学校が、開拓使のもとに設立されたこうした背景は、やはり念頭におかねばならない。

かかる上に、お雇い外国人の積極的導入というもうひとつの

要素が加わることによって札幌農学校はその特色をいちだんときわだたしめ、かつ個性化する。

三 札幌農学校と米欧文化

では、そのお雇い外国人の問題に視点を移そう。

明治初年のお雇い外国人の雇用状況は表7の通りである。それは工部省を中心に、イギリス人をビークとしてその技術導入がはかられているわけだが、開拓使におけるお雇い外国人の問題は、こうした全体状況の一環であることをまず確認しておく必要がある。

さて、周知のように、開拓長官黒田清隆は、農学校における「専門学科」のため、一八七五年（明治八）、政府に米国人教師三名の雇傭を願ひ出、外務省はアメリカ駐在全権公使吉田清成の手を経て、州立マサチューセツツ農科大学長ウィリアム・スミス・クラーク（William Smith Clark）およびウィリアム・ホイラー（William Wheeler）、ダヴィッド・ビー・ペンハロー（David P. Penhalow）を決定し、彼らは一八七六年（明治九）六月、東京に着いた。

かくして、クラークらを迎えた札幌農学校は、その年八月十四日、札幌の地で開校式を行い、発足した。このときクラークは満五〇歳。

表7 太政官・各省お雇い外国人一覧（1874年）

	アメリカ	イギリス	フランス	ドイツ	その他	計
太政官	1人	1人	1人	1人	1人	5人
外務省	6	2	1	1	4	14
内務省	4	9	7	—	7	27
陸軍省	7	16	—	—	4	27
海軍省	—	—	36	—	2	38
文部省	—	29	36	—	1	66
工部省	14	25	10	24	4	77
司法省	7	185	13	6	17	228
宮内省	1	1	4	—	2	8
開拓使	—	—	—	2	—	2
	7	1	—	3	—	11
計	47	269	108	37	42	503

備考 梅沢昇『お雇い外国人』213ページ第2表bより作成。この1874年が工部省のお雇い外国人のピークで、130人以上を数える期間は1871～79年である。やがて、東京大学や工部大学の卒業生がしだにお雇い外国人にとって代わる。

この札幌農学校の設立経過から、次のような特質を指摘できる。

第一は、すでに述べた北海道の風土性の上に、投資型の開拓使のもとにこの学校がつけられたことである。これはあらゆる点で札幌農学校を根底で規定している。第二以下は、このことをぬきにしては考えられないのである。

第二は、開拓使は、開拓権大書記官調所広丈を「養長」としながら、「教頭兼養國長」を理学兼法学博士クラークとし、「懇切ノ恩遇」特に「異常ノ信任」のもとに、このお雇い外国人に札幌農学校の教育と研究を委ねたことである（『札幌農養第一年報』六四ページ）。

だから、このクラークの個性をぬきにしては札幌農学校は語りえないのである。

クラークは、第一期卒業生佐藤昌介（のち北海道帝国大学総長）が回顧するように、「先生は普通の教育家でない。経世家であり、軍人氣質もあり、又た熱心なる基督教の信者であり、その人格は円熟せるものであった。自然科学に対しても造詣深く、その得意の科学は植物学と化学であつた。農学者でないことは自ら云う所であつたけれど農場の経営に対しては一見識を持っておつた。当時の先生の立場よりして、学校の管理や組織や学生の訓育指導に対しては、老練なもので非凡なる手腕を持

たれて居つた」(「ウキリアム・エス・クラーク先生を語る」)⁽⁸⁾のである。

クラークは、国家や民族、あるいは人種をこえて、教育家、学者として、はたまた学校経営者として札幌農学校へその情熱をそそいだ。そこには人種的偏見はもろろない。その真摯な生活態度に人々は、マックス・ウェーバーいうところの「プロテスタンティズムの倫理」の体現をみうるわけだが、事実、札幌農学校においては、教員・生徒に禁酒・禁煙を誓わせ、「賭博若シクハ誓約^{イロハ}乱発^{イロハ}ノ罪ヲ犯スガ如キ事アルヲ禁シタ」(前掲『第一年報』五八ページ。片仮名ルビは原文)のである。そして、生徒に労働を課し、対価を支給したのは、「給料ノ為メニ非シテ、勤勞ノ習慣ヲ養成シ、金錢使用ノ經濟ヲ知ラシメンカ為メ」(『札幌農学校第二年報』六二ページ。句読点は引用者、以下同)であった。

それは同時に、生徒に労働の価値を悟らせ、自主・独立の気風を育てるためであり、近代的な実学思想を身につけさせるためでもあった。クラーク以下は札幌農学校における教育を通して、米欧的な合理的な思考と体系的な論理を体得せしめようとした。いま、札幌農学校の各年度の公式報告書である『札幌農学校年報』を続けば、そのことを具体的に知りうるし、そこには第一節でみた一八七〇年代の米欧文化の諸特徴とこの札幌農学

校の内幕とが、いかに重なり合っているかを読みとることができる。⁽⁹⁾

そして、このクラークらの米欧文化に裏打ちされた理念を、キリスト教による人間教育を含めて開拓使は許容し、この学校への教育内容への干渉を抑制したのである。クラークのいわゆる「Be Gentleman」や「Boys Be Ambitious」も、こうした北海道における開拓使下の札幌農学校という場において、はじめて理念としての説得力をもちえた。クラークの札幌滞在は僅か八カ月に過ぎなかったが、その間に彼はみずからの教育的情熱と個性を通して、この理念をこの学校の基礎にすええたのである。そこに札幌農学校が日本における大学のひとつの源流としての位置を占めるゆえんを見出すことができる。

だから、第三には、州立マサチューセッツ大学のカリキュラムをアレンジして組まれた札幌農学校の教育を通して、米欧文化は積極的に受容された。

この点に関し、『年報』をもう少し詳しくみていくことにしよう。

『札幌農学校第一年報』(一八七七年に英文で刊行され、のち邦文刊。復刻版、北大図書刊行会、一九七六年)には、一八七七年(明治一〇)三月二日付のクラークの開拓長官黒田清隆あての報告を載せているが、その冒頭で彼は次のようにいう。

先哲謂ヘルアリ、曰ク国ニ人民無ンバ国其国ニ非ズ、人ニ心志無ンバ人其人ニ非ズ、然リ而シテ人ノ心田モ之ヲ耕サレバ、亦タ有レドモ無キガ如シ、故ニ一国民ノ最大貴重ノ産物ハ耕耘ノ至リ尽セル心田是レナリ、田圃・製造所・機械所及ビ鉱山ノ産物ハ固ヨリ貴重ナリト雖トモ、未ダ学校ノ産物ニ踰ルモノアラズ、学校ノ教育其宜シキヲ得バ、其国自カラ繁榮シ、学事ノ輕忽ナルハ其国衰亡ノ確徴ナリ、故ニ政治肝要ノ要点ハ、則チ其学制ニアリ、一國能ク志ヲ其少年ノ教育ニ用ユレバ、則チ學術、技藝、富國強兵等凡ソ人ノ以テ光榮トナス所ノ事皆隨テ隆興スベシト、信ナル哉言ヤ(一―二ページ、句読点・傍点は引用者、以下同)

このことはあの岩倉使節団も痛感するところであった。彼らがいかに教育制度や学校の見学に熱心であったかは『回覧実記』に明瞭である。クラークと黒田の間にも、この点について十分な合意があつたであろうことは、さきの黒田の明治四年十月の意見書からも察することができる。

クラークが離札したあと、その職はホイラー、ベンハロー、ブルックス(William P. Brooks)と引継がれていくが、そのホイラーもまた『札幌農養第二年報』(英文・邦文ともに一八七八年刊)の中で、一八七八年(明治一一)三月十八日付、黒

田あてに以下のように述べる。

数百年間深ク学問ヲ貴重シナガラ、格物及ヒ社会人力ノ最要法理ヲ学ハズ、凡ソ百ノ知識ノ本源トシテ均ク魯鈍ナル支那ノ古典ニノミ是レ信依スルノミナラズ、或ハ之ヲ尊崇シ、遂ニ其本源ヲ踰テ其上ニ登ルヲ得ズ、智戦ノ武器ハ文字ノミニシテ、其陣形ノ無數ニシテ且ツ恐ルベキ容易ニ之ヲ破ル可ラズ、偶マ之ヲ破リ得ルモ、尚進テ一層ノ勝ヲ奏スベキ力ト時トヲ貯ヘ得ルノ人ハ、蓋シ僅々ニ過キズ、或ハ僅々ノ美術ノ驚クベキ完全ノ度ニ達セシモノナキニ非ズト雖トモ、事物實際ノ計画及ヒ發明法ニ至テハ、奇異ニ之ヲ忽視シ、諸侯及ヒ諸將ハ富貴ヲ専有シテ以テ万民ハ貧窮ヲ極メ、政權ヲ僭有シ、諸方ニ割拠シテ、以テ其国土ヲシテ一般ノ幸福ヲ進捗スベカラザラシメ、全国人員ノ半(国民中最モ能力アルモノ―原注)ヲ拳ケテ常ニ之ヲシテ耕サシテ飽キ、織ラズシテ暖ナラシメ、以テ他ノ半ヲ貧困ニ陥レタリ、『第二年報』一六一―一七ページ)

ここには、アジアないし日本の学問のあり方と社会との関わり方への批判があり、権力がいかに国民の幸福ないし能力を阻害しているかが説明されている。それは第一節にみた岩倉使節団の米欧とアジアを対比しての考察と共通するところがある

が、さらに、次の一文をみるときいっそ明瞭となる。

日本ノ古学ハ広大迂遠ニシテ、飽マテ記憶力ヲ育養シ、思想力ハ之ヲ輕忽セシモノ、如ク、其工芸技術ハ數百年間同一ニシテ、發明及ヒ新規計画ノ力ハ絶テ無ク、惟々摸擬及ヒ手芸ノ巧妙ハ非常ノ高度ニ達シ、無力ノ下民ハ惟々強カ者ニ是レ從ヒ、僅カニ生命ヲ保ツニ足ルニ過ザルハ小分ニ安ズルコトニ慣レ、強ハ弱ヲ屈服シテ益々之ヲ無力ニ致セシナリ（同上、一七ページ）

ホイーラーが強調しようとしたところは、ひとつは日本（ないしアジア）における「數百年來存在セル一種ノ学方法及ビ社会ノ景況ヨリ發出スル所ノ心思ノ遺伝質」であり、もうひとつは、「思想ノ使用及ヒ慣習ヲ纏繞拘束セル凡百事物ノ勢力」の存在であつた（同上、一六ページ）。

この二つの打破こそが、日本を国際社会に飛躍させる能力開發の基本とみたのである。だから彼はいう、「現今幸ニ政体全ク変革セリ」と。体制変革によつてその道はひらかれたと彼はみるのだが、慎重にも「數世ヲ要セシ所ノ癖ハ之ヲ破ルモ亦數代ヲ要スベキナリ」と指摘することを忘れてはいない（同上、一七ページ）。ここにも教育の重要性が自覺されている。

ホイーラーの報告書を見ると、札幌農学校がいかにか「自。為。人」（『第二年報』一九ページ、圈点原文、以下同）の養成を

めざしていたかがわかる。

彼は「論理」と「実業」、「事物」と「道理」の因果關係の認識の必要性を強調する。いわく、「事物ト道理トハ學問ノ本末ナレバ、其理論上ノ關係ハ常ニ必ス之ヲ銘記スルヲ要ス、他日之ヲ一般ノ世務上ニ實用スルニ至ラバ、人ヲ益スルコト十倍ナルハミナラズ、理ヲ知レバ其事ハ心ニ根拠スルコトモ亦堅固ナレバナリ、事ハ如何ヲ知ラバ單一ハ技ニ達スベク、其事ハ何ノ理ニ基クヲ知ラバ、實ニ其一事ハミナラズ都テ其類ノ事物ニ通スベシ、知識モ思想ナケレバ拡充ノ力甚タ弱シ、知識思想ト相合シテ始メテ無限ノ功用ヲ生スベキナリ」（同上、二〇ページ）と。

さらに、ホイーラーのいうところをもう少し聞こう。

我輩ノ少年ニ数学・論理学及理学等ヲ教授スルハ、單ニ彼ヲシテ官庁ニ其等數及ヒ図解ヲ提出セシメ、或ハ其他人ヨリ借り來リタル意思及ヒ解説ヲ廟堂ニ持參セシメンカ為メニ非ズ、又タ其式文及ヒ分類書ヲ高ク天然製練場ノ門戸（世間—原注）ニ掲ゲシメンノ意ニモ非ス、理非曲直ヲ辨別スベキ完全ノ真理ヲ貯蓄セル心思ヲ生出シ、變化極リナキ世ノ問題ト形勢トニ応シ、旧理ヲ推シテ己ガ新意ニ及ボシ、成就スベキノ目的ヲシテ之ヲ成就スルハ解引タラシムルコト、尚天地間ノ簡易ナカラニ不思議ナル事物ハ暗ニ其源因ヲ示ガ如クナラシメンガ為メナリ（同上、二一ページ）

ここには札幌農学校のめざしたところが遺憾なく語られている。

ホイーラーは、クラークこそは「東洋第一ノ農藝ヲ設立センガタメニ聘セラレ、其奉職ノ日月ハ短カント雖トモ、其成功ヤ大ナリトス」(同上、三一ページ)という。そして、「同氏(クラーク引用者注)ノ学識、経験、及ヒ尽力ヨリ生セシ所ノ裨益ハ、本使ノ永ク感銘セラルベキ事ニシテ、同氏振作ノ所行ハ其日本ニ駐在セシ時ニ於テ相接待セシ所ノ生徒及ヒ諸士ノ心ヲ提擡シ、常ニ憤心ヲ生セシムルノ源トナルベシ、豈ニ感歎セサルヲ得ンヤ」(同上、三一―三二ページ)と述べる。

クラークの理念が札幌農学校の源泉となり、ホイーラーや生徒たちがこれを忠実に受けついでいることがよみとれる。

私は別の機会に、岩倉使節団の関心を農学校に限定し、一行帰国後の制度的結実に局限すれば、それは駒場農学校(内務省勸業寮管轄下に創まり、一八七七年十月、農学校と改称、翌年一月開校、のち東京帝国大学農科大学)と結びつくことを指摘し、その意味では札幌農学校はこの使節団とはむしろ別のところ、つまり開拓使がアメリカの開拓をモデルとし、北海道へクラークを招聘したところに発足したことを述べた。⁽¹⁰⁾

だが、これまでみてきたところを第一節と重ね合わせてみると、岩倉使節団が米欧文化とアジア(日本)のそれとを対比し

つつ洞察し、自省したところを、むしろ札幌農学校がいかにみずからの存在をかけてその実現をめざしていたかを知ることができるのではないか。

だから、札幌農学校は、農学校としては駒場農学校と共通性をもちつつも、後者には「農学」(林学等を含めて―原注)に対する社会的な蔑視(原文注略)があった⁽¹¹⁾のに対し、前者には「キリスト教に依拠する開拓者精神(自由と進取―原注)の鼓吹」を基調とした「全人格的な教育」がなされた⁽¹²⁾と指摘されているのである。

もう一度いえば、制度としては、駒場農学校が岩倉使節団(ないし大久保政権の殖産興業・教育政策)と比較的ストレートに結びついたのに対し、札幌農学校は開拓使(北海道というワン・クッションをおいたところに設置され、理念としては、岩倉使節団が洞察し、自省した米欧文化を、クラーク以下の異色なお雇い外国人を通して、「全人格的な教育」の理念を基調とした場で、積極的に受容した、ということになる。

こうした札幌農学校の特質はあらためて強調してよい。そして、こうした特質をもつ札幌農学校が、のちの大学への起点となっているところに矢内原忠雄氏が「大学と社会」の中で指摘する次の一文が重要な意味をもつのである。

私学は別と致しまして、官学と呼ばれるものの歴史をみ

ると、明治の初年において日本の大学教育に二つの大きな中心があつて、一つは東京大学で、一つは札幌農学校でありました。

この二つの学校が、日本の教育における国家主義と民主主義という二大思潮の源流を作ったものである。大ざっぱに言つて、そういう風に言えると思うのです。⁽¹³⁾

そして、さらに氏が、「札幌から発したところの、人間を造るというリベラルな教育が主流となることができず、東京大学に発したところの国家主義、国体論、皇室中心主義、そういうものが、日本の教育の支配的な指導的理念を形成した⁽¹⁴⁾」とし、そこに近代日本の悲劇があつたというとき、札幌農学校の日本近代史上における位置の重要性は、いちだんと浮彫りにされるのである。

それは本稿の主題のいきつくべきところであつた、といつてよいだろう。

〔注〕

- (1) 詳しくは田中彰「岩倉使節団における『東洋』と『西洋』」(『中嶋敏先生古稀記念論集』下巻、汲古書院、一九八一年、所収) 参照。
- (2) 詳しくは田中彰「岩倉使節団のアメリカ観」(和歌森太郎先生還暦記念『明治国家の展開と民衆生活』弘文堂、一九七五年、所収) 参照。

- (3) ジャーナリストであり、評論家であつた茅原華山(廉太郎)が、一九二三年(大正一二)の「北海道の研究」という論稿で、「北海道は日本のアメリカである、アメリカは欧羅巴の北海道である」(『船晦以後茅原華山文集』内観社、一九二九年、七四ページ)といった言葉を想起せよ。

- (4) 田中彰「近代天皇制への道程」吉川弘文館、一九七九年一四二—一四四ページ参照。

- (5) 渡辺修二郎「我国最初の女子海外留学生」(『新旧時代』二の二、一九二六年一月)。

- (6) 田中彰「岩倉使節団」(講談社現代新書、一九七七年)二四ページ。

- (7) 田中彰「日本の歴史24明治維新」(小学館、一九七六年)、前掲「岩倉使節団」、田中彰「大久保政権論」(遠山茂樹編『近代天皇制の研究』上巻、岩波書店、近刊所収予定)等参照。

- (8) 中島九郎「佐藤昌介」川崎書店新社、一九五六年、三四—四一ページ。

- (9) 発想の類似は以下本文にみる通りであるが、具体的な考察の一例を示せば、『札幌農書第二報』における運搬に対する合理的な省力化の問題(六八—七三ページ)と、岩倉使節団の報告書「米歐回覧実記」第五編第九〇巻の「運搬総論」(特に一七八—一八五ページ)の叙述を比較してみると、その符合は驚くほどである。

- (10) 田中彰「農学校と岩倉使節団」(昭和54年度科学研究費研究成果報告書「日本近代史における札幌農学校の研究」代表者永井秀夫一九八〇年三月)。

- (11) 斎藤之男『日本農学史』大成出版社、一九六八年、一六五—一七二—一七三ページ。

(12) 札幌農学校開設の翌々年、つまり一八七八年(明治二一)一月二十四日の駒場農学校の開校式に明治天皇が臨幸、大臣参議以下が列席、内務卿大久保利通は天皇へ農学校規則・新校舍絵図および同校の鑰等を奉呈するとともに、勅語に応えた祝詞の中で、「嗚呼、我邦ノ農事ヲシテ駸々乎トシテ日ニ開ケ月ニ進ミ、物産ハ益々繁殖ニ赴キ、民生ハ益々富饒ニ至ラシメンコトハ、今日ヨリ、始マラン」と奏上した。また、大久保はその賞典禄二カ年分(五四〇〇円余)を農学校奨学資金として寄附したのである(勝田孫弥『甲東逸話』富山房、一九二八年、一六九—一七一ページ)。

大久保政権がいかに駒場農学校に密着していたかは、右の事実からも明らかであろう。

(13) 矢内原忠雄『大学について』東京大学出版会、一九五二年、九二ページ

(14) 右同、九三ページ

(北海道大学文学部教授)